蛍池聖書教会　2021年2月7日　二月第一主日礼拝メッセージ

森田　悦弘

キリストに学ぶ　　**マタイ 11:28～30**

わたしたちはひとり残らず、意味と目的をもって神に造られました。「人生に意味や目的などない」と言う人もいるでしょう。しかし、人は、意味や目的なしには生きられません。意味や目的は無いと言う人であっても、意識しなくても、何かしら人生の意味や目的を自分なりに設定しながら生きているのです。けれども自分で設定したものは、確かなものではないので、立ててはこわし、こわしては立て、右に曲がり、左にぶれるといった不安定なものになってしまいます。私は家で金魚を飼っているのですが金魚を眺めながら時々思うんですよね。狭い水槽の中で一日中と言おうか、ずっと過ごしています。どこかもっと広い池か川に行ってみたいとは思わないようですね。餌は一日一回食べますがそれも何カ月も全く同じ餌です。もうちょっといい餌を食べさせてくれなんて言いません。（まあお腹が空いている時は水槽の中の温度計をツンツンとつついたりしますが）六匹いますが狭い中で相性の悪いのもいることだと思います。「あの白いのとは一緒にやっていけない」と文句を言ったり、いじめたりもしません。まあそういった他愛もないことを思ったりしています。でもそのようなことを考えるのは人間はいろんなことを考えたり、思ったりして生きているからだと思うのです。突き詰めれば、人間は自分の人生観や世界観を土台にして自分の生きている意味や目的を様々な場面で絶えず考えたり、感じていると言えるのではないでしょうか。

さて人生の意味や目的は、自分で作り出すものではなく、神から与えられるものです。そして、それは、聖書の中に明らかに示され、誰でも聖書に尋ねさえすれば、それを見い出すことができます。難行苦行の末にやっと分かるようなものではありません。もし、そうであるなら、ほとんどの人は人生の意味や目的を見いだせないまま生涯を終えてしまうことでしょう。人生の最後の瞬間にそれを悟ったとしても、もう遅いのです。若い日のうちに人生の意味を知り、その目的にそって生きることができてはじめて、人生の終わりに満足を得ることができるのではないでしょうか。

＜大いなるご命令＞

人生の意味と目的に関して、聖書には、はっきりとした言葉があります。「『心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』これがたいせつな第一の戒めです。『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ』という第二の戒めも、それと同じようにたいせつです。律法全体と預言者とが、この二つの戒めにかかっているのです。」マタイ 22:37-40　つまり人生の目的とは神と隣り人を愛して生きることであるということです。神と隣り人という愛する対象があってこそ自分の人生に意味があるのです。ここで命じられている「愛」には順序があります。イエスは「神への愛」を「第一」とされ、「隣り人への愛」を「第二」とされました。「神への愛」と「隣り人への愛」は結びついていて、決して、切り離すことはできません。しかし、「神への愛」は「隣り人への愛」に勝るものでなければなりません。なぜなら、神の愛は人の愛に勝るからです。

このことが理解されていないと、神への愛と人への愛とが混同され、神への愛が第一のものでなくなってしまいます。そして、「神への愛」が第一のものでなくなるとき、第二のもの、「隣り人への愛」も、そのよりどころを無くしてしまうのです。

さて罪あるわたしたちの愛は、そのままでは、ほとんどが自己愛で成り立っています。人に良くすることがあったとしても、それは自分が好む人に対してであり、自分に益となって返ってくるかどうかという計算がどこかで働いていますし、自分を満足させるものであることが多いのです。それは神が求めておられる純粋な愛ではないのです。そんなわたしたちが本物の愛に生きるには、聖霊によって神の愛を内面に

注いでいただくほかはありません。ローマ 5:5 に「私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。」とあるとおりです。この、聖霊が注いでくださる愛とは、どんな愛でしょうか。ローマ 5:8 にこうあります。「しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。」それは、キリストがわたしのために死んでくださったほどの愛です。これほどの愛で愛されていることが分かるなら、わたしたちは神を愛さないではおれなくなります。そしてこの神への愛のゆえに、隣り人への愛が実践されていきます。神を愛して生きた人生ほど満ち足りた人生はありません。神の愛のゆえに隣り人を愛して生きた人生ほど意味深いものはありません。誰でも神に愛され、人に愛されることを願います。神に愛され、神を愛することの中に人生の意味を見出す人は幸いです。

＜大いなる宣教の使命＞

この神への愛、隣り人への愛にもとづき、また、その愛を実践するために、わたしたちには、「大宣教命令」 と呼ばれている、使命が与えられています。それはマタイ 28:18-20 にあります。主イエスはこう言われました。「わたしには天においても、地においても、いっさいの権威が与えられています。それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。そして、父、子、聖霊の御名によってバプテスマを授け、また、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい。見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。」このことばを読む時にわたしたちの多くは、こう言うでしょう。「このイエス様のことばというのは、要するに“伝道しなさい”ってことでしょう。」と。しかし、イエスのことばは、伝道するために集会や行事、また、教会のいろいろな活動をもっとしなさいと言っているのではありません。ではイエスは、実際のところ、何を、わたしたちに託しておられるのでしょうか。

「それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。そして、父、子、聖霊の御名によってバプテスマを授け、また、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい。」この文章の中心の命令は「弟子としなさい」です。「行って」、「弟子とし」、「バプテスマを授け」、「教える」という四つのことが命じられているようですが、じつは、重要なことばは「弟子としなさい」です。「行って」、「バプテスマを授け」、「教える」というのは、人々を弟子とするための方法や過程を言っています。つまりイエスがわたしたちに託された使命は、宗教としてのキリスト教を広めることや教会を宣伝すること以上のものであることが分かります。それは、キリスト教に好感を持つ人を増やすということではなく、キリストに忠実に従うキリストの弟子を生み出し、育てるということです。

これは、担うのに重い使命であり、達成するのに難しいゴールです。しかし、だからといって、これを水増ししたり、別のものと置き換えたりすることは許されていません。そんなことをしたら、教会は教会でなくなります。それだけではなく、教会を通してキリストの弟子となるはずの多くの人が失われてしまうのです。それがどんなに困難な使命であり、ゴールであったとしても、そこに向かって努力し、向上を目指していくこと、それが、キリストからいただいた使命に生きるということなのです。

＜大いなる招き＞

きょうの聖書箇所は、有名なイエスのことばです。誰でも本当の安らぎを得ようと思うならキリストのところに行くことであると教えています。それと共にキリストの弟子になるようにとの招きの言葉でもあります。キリストの弟子になるとは、キリストのもとに来ることです。そこに罪の重荷を下ろすことから始まります。ある人が「人類最大の重荷は罪である」と言っていますが、わたしたちはみな罪の重荷にあえいでいます。一つ罪の重荷を下ろしたと思うとまた次の新たな重荷がやってきます。罪には二面性がありますので私の罪が原因となっている重荷もあれば、他人の罪の影響を受けての重荷もあります。主イ

エスは、そんなわたしたちに「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」と言っておられます。主は、どうしてそう言うことができたのでしょうか。それは、イエス・キリストが、あの十字架の上で、わたしたちの罪の重荷を、すべて引き受けてくださったからです。

では、いちどイエスのもとに来たら、あとは、もう来なくてよいのでしょうか。そうではありません。罪の重荷を下ろし自由になり、罪を赦され平安を得た、わたしたちですが、世に生きるかぎりは、罪との戦いは続きますし、人生の旅路には雨も風もあります。勝利や平安は、主イエスにあるのですから、わたしたちは何度でも主のもとに来るのです。いいえ、主のもとに留まり、主と共に歩むのです。

イエスはこのことを「わたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。」という言葉で表わされました。わたしたちは、罪の重荷を主におまかせしました。もう、その重荷を背負い込む必要はありません。しかし、何も背負わないのではありません。重荷にかえてイエスの「くびき」を背負うのです。「くびき」というのは、二頭の動物を繋ぐもので、そこに鋤などをつけて畑を耕すのに使います。これは、わたしたちがイエスから別の重荷を負わせられるということではありません。むしろ、わたしたちが、ほんとうは、ひとりで負わなければならないものを、主がともに背負ってくださるということなのです。

さらに「イエスのくびき」とは何でしょうか？　イエス様は罪の中にいる私たちが滅びることのないように罪を身代わりに負うことによって救い出すために私たちのところに来て下さったのです。つまり「イエスのくびき」とはイエス様の別の仕事ではなくて、私たちの抱えている重荷と問題を代わりに引き受けるということがイエスのくびきと言うことです。

力の弱い牛が一頭で広い畑を耕さなければならないとしたら、その牛はたちまち疲れてしまいます。しかし、力の強い牛と「くびき」で繋がれ、いっしょに畑を耕すとしたらどうでしょうか。力の弱い牛も、あまり疲れずに、その日の務めを果たすことができます。イエスは、わたしたちがひとりで背負いきれないものを、わたしたちと共に背負うことによって、わたしたちを支えてくださるのです。罪の重荷を取り去っていただいたわたしたちが「大いなる宣教」という使命に生きるようになったことを意味しています。しかも、この使命を果たすにも、ひとりでするのではありません。「くびき」のもう一方はイエスが負ってくださるのです。イエスの「くびき」を負うというのは、イエスから何かを背負わせられることではなく、わたしが背負うべきものをイエスに背負っていただくことなのです。

イエスは「わたしのくびきを負って、わたしから学びなさい」と言われました。じつは、この「学ぶ」という言葉から「弟子」という言葉が生まれました。ですから、「弟子」には、「学ぶ者」という意味があります。イエスが私の重荷を担ってくださることによって、この世の「くびき」から解放され、次にイエスとともに、与えられた使命に生きる。神を愛し、人を愛するために生きる。それが、「弟子となる」ことなのです。そのように、自らが弟子となることに励むとき、わたしたちは、他の人をキリストに導き、もうひとりの弟子を生み出すことができる者になることができるのです。

キリストの弟子となる道、そこには信仰と訓練が必要です。しかし、それは、特別な人にしかできないようなものではありません。イエスが共にその道を歩んでくださいます。イエスがその使命を果たす力を与えてくださいます。イエスが「そうすればたましいに安らぎが来ます。」と約束されたように、イエスに学ぶ道、キリストの弟子となる道は、わたしたちの魂に安らぎが訪れ、魂を生かす道なのです。